

日本原記 続編 (2)

日本の精神風土の形成



2019年5月15日 三水会

野口幹夫

目次

- 1、 総論 原日本精神の誕生
- 2、 基底にある縄文精神 <従順 しかし精神の自由人>
- 3、 江南の稲作人を受け入れた弥生時代 <勤勉な組織人>
- 4、 天孫族が支配者となったやまと時代 <支配層としての役柄本位>
- 5、 これら3つの混合が生んだ原日本精神
- 6、 奈良時代から近代までの日本的精神の試練
 - 6-1 仏教伝来とその日本化
 - 6-2 キリスト教伝来と宗教への危険視
 - 6-3 儒教と江戸哲学
 - 6-4 明治維新と西欧文明の受け入れ
 - 6-5 敗戦と戦後
- 7、 地球時代のヒューマニズム思想から見る日本精神の弱点

今後の課題と展望

1、総論 原日本精神の誕生

日本原記続編(1)で、これまで定説の無い日本という統一国が生まれるまでの歴史過程を、遺伝子追跡という新しい科学の目を借りて推論してきた。大陸から付かず離れずの存在でありながら、しかも海で隔離された円弧諸島ならではの特質が見事に活かされた歴史であった。しかもその円弧諸島は生きるための資源には恵まれていたために、そこに住む人々の間で死活をかけた奪い合いが不要で、共存共栄が可能であったことが幸いした。そのために、縄文 弥生 そしてやまと時代に至る三種の人間集団の混成が、武力による制圧という場面は少なく、ほぼ平和裏に積み重なって出来たのであり、それは世界的にも例の少ないものであった。すなわち、どの歴史段階でもどれか特定の階層が全滅するといったことが無く、それぞれの階層が並存して生き延び、それぞれの個性を温存しつつ、相互に影響をあたえつつ、交わりつづけたわけで、この積み重なり の精神風土が後世に続く「原日本精神」の基本になったと考える。

そのユニークさは、この民族混交の歴史の中で、縄文日本語が継続して使われたという貴重な歴史的事実でも見ることができる。その貴重さを考える上で少し時代をずらして考えてみよう。

この始原期間を経て、国家統一を果たした大和朝廷は、その後新たに中国や百済、新羅、高句麗などから続々と人材を受け入れた。先の時代と決定的に違うことは、これら渡来人を受け入れた飛鳥 奈良時代は、受け入れる主体となる国家が確立していたことだ。したがって彼ら渡来人は受け入れられるためには、縄文以来の日本語を習得しそれを使うほかなかったのは当然のことである。

しかし元に戻って、縄文・弥生・大和政権樹立までの始原時代を考えると、主体的国家などないままの縄文諸部落の世界に、自然態で江南の民や天孫族がなだれ込んだのである。かれらは母国語をもちこんだはずである。しかも彼らが文明的には優越した存在であったので、その言語で原住民をリードし、使用させることができたはずである。その例は前回のレポートでも触れたように日本語の一 二 三 四 五 六 七 八 九 十をイチ ニ サン シ ゴ ロク シチ ハチ クー ジュウと呼ぶのは呉の言葉だとされる。原日本語で漢字を読むのは訓読みである。桜花を「さくらばな」と読むのは訓読み、「おうか」と読むのは音読みで中国からの伝来の読み方だ。ところがこの数詞の訓読みはない！ので、イチ ニ サンの呉の数え方がそのまま縄文語に取り入れ

られたという推測が成り立つ。このように原日本語である縄文語に無い数詞のような言葉は移住者である江南の民の言葉を移入したが、日本語の骨格は変えることなく移住者も、縄文日本語で生きることを選んだのである。

特に最後に支配統一した天孫族は、北方中国語を使っていたし、原初的漢文字すら持っていたと思われるが、北方中国語を被支配民に押し付けることはなかった。おそらく日本列島に上陸する以前、朝鮮半島滞在時に倭人から縄文日本語を習得することを準備行動の一つとして行ったとみられる。彼らの行動が江南の民が支配する北九州地域を避け、隘路を通過して山越えをして、縄文部落に接しそこで拠点を確認していったことから推察できる。持ってきた文字も縄文語に合わせた使い方をしたのである。

このことを考えれば、社会的な人間関係においては、縄文人は常に従順な服従をもって、社会的地位は下位に置かれることを良しとしたにもかかわらず、縄文語を代表とする縄文文明の包容力は侵入した二つの文明を包摂したほど強かったと言える。原日本精神を探るためには、この言葉の選びが示すように、縄文文明が基底として残っていることは重要な点である。

とはいえ、この縄文文明に稲作をもちこんだ江南人は指導者としての思想を植え付けたであろうし、執念をもってこの列島に統一国家を形成した北方系中国人天孫族が持ち込んだ高度な政治思想は、表立った社会には決定的な影響を与えたであろうから、底流の縄文、中堅が弥生、表層が天孫支配層といった三重の混成から「原日本精神」は成り立ったのであろう。

丸山真男教授が名著「日本の思想」でこう語っている。「日本における思想的座標軸の欠如：自己を歴史的に位置づけるような中核あるいは座標軸に当たる思想的伝統は我が国には形成されなかった。」

実はそうではなかったのだ。我が国の思想的伝統は、この3つの面を持つ万華鏡がその正体で、照らす方向で玉虫色に輝くのである。それを理解しないで、一つの明確な体系を期待する限り、我が国は「無思想」だと嘆くことになる。

それから2000年、様々な歴史的な事件が日本を襲い、精神風土も成長していった。特に影響の大きかった事件は奈良時代の仏教伝来、戦国時代のキリスト教伝来、そして明治維新以降の西欧文明の流れ込みと第2次世界大戦の敗北である。

これらの時代時代における新たな思想流入によって、日本精神は変化し豊かになって

いったことは間違いない。しかしその際に、日本は基底にある「原日本精神」をもって受けとめ、それぞれを日本流に消化して、いわば日本流翻訳が施していったことは歴史的事実として有識者の多くが指摘するところである。

とすればそのしぶとい「三位一体の原日本精神」とは何だったのか、いささか単純化することによって、大筋を描き出してみよう。

2、 基底にある縄文精神 <従順 しかし精神の自由人>

縄文文明は1万年の間、日本で純粋培養された。現代に続く縄文日本語もこの時代に創生された。文字をもたなかったので、書誌的記録は伝わらなかったのだが、その精神風土は遺跡と遺物で推定するほかない。



まずは「祭り好き」だった。三内丸山の巨大六本柱祭り台に示されるように、冬至の日没が岩木山山頂に落ちるのをこの巨大な祭り台で祝ったのだ。金沢のカナモリ遺跡、青森の列石遺跡などすべて、その規模の大きさから言って、当然近隣の村落の群衆が総出でこれを作り、太陽の甦りを祝ったのだ。しかし太陽信仰というような一つの超絶への信仰といったものではなく、巨石や巨木、特徴ある山などのさまざまな自然物を信仰の対象とした痕

跡があるので、いうなれば自然信仰心を基本とし、特徴はシャーマンのリーダーの女性を中心としてよく準備された祭りこそが、その基本であった。発掘される縄文土偶は現代人には奇怪な像としか見えないが、同時に作られているイノシシなどの動物土偶の造形のリアルさを見る時、例えば有名な遮光仮面を付けた土偶も実はリアルな女性シャーマンを写實的に表現しているのではないかと思われる。思い切った仮装で着飾った女性シャーマンを中心にそれ



が表すような想像を絶する巨大な祭りが特徴であった。いまの日本人の約7割が無宗教と称し、かつ同時に自然的宗教心は大切と答え、年一回の祭りには年間を通して準備して参加する宗教観はそのまま縄文人のそれに近いのである。

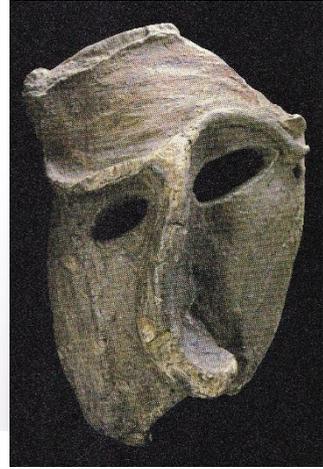
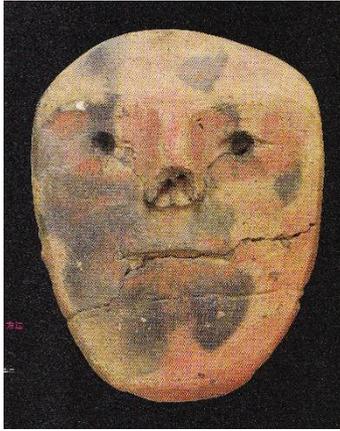
祭につながって、芸術が尊重された。狩猟・漁撈採取でも日本は気候温暖だったから食生活には余裕があったので、巨大な祭り空間を作り上げ、それを飾り上げるためのさまざまな芸術的作品を作った。代表的なものは火炎土器である。それは尊重され交換された。

表紙を飾ったのは縄文中期南アルプス市鋳物師屋遺跡で出土した人形装飾付有孔罎付土器（高さ54.8cm）である。浮彫されている人物は、祭りの踊り手でおそらく男性で、手を挙げて大声で歌いながら踊っている姿であろう。



弥生時代になると、縄文人は稲作文明をもたらした江南の民を尊敬して受け入れ、その指導に喜んで従った。まずは従順であった。魏志倭人伝に民衆の姿を表現した文がある。「敬意を示す作法は、拍手を打って、うづくまり、拝む。」私は日本の神社の発祥は、縄文人部落が大木や奇岩のある丘を聖地として祭の場としていたが、弥生人の渡来を受け入れたときに、その聖地を住みどころとして提供し、そこには踏み込まないように、入口に柱や鳥居などの結界を施したのが神社の始まりであったと考えた。敬意を示すのが拍手だとあるのが今に伝わる神社の参拝儀礼なのだと思う。

農民となった縄文人は農業もたちまち芸術としたことであろう。四季に従い自然を尊重する神事を農に取り入れた。芸能もそれに伴ったのであろう。能狂言の源流となる田楽や散楽を生みだし楽しんだことであろう。下図に縄文仮面のいくつかを紹介する。いずれも滑稽味があって、個性的で、能面の源流になっていったことが髭鬚とする。奈良時代に伝った西方の伎楽面とは異なり人間味がある。



羽生市発戸 縄文後期 能代市麻生 縄文晩期 岩手県一戸町 縄文後期

縄文人の祭りには祝い唄はつきものであったであろう。何も残されていないが、想像する上で有力な手掛かりがある。一つは七五調という日本語と切っても切れない語調がある。他国言語に無いこの語調は縄文人の祭り歌に起源を発しているに違いない。弥生人や天孫族などの大陸から持ち込まれたことはありえない。母音で終わる日本語であればこそこの語調が生まれるからだ。万葉集歌謡から始まり、和歌・俳句のルールとなり、能狂言以降の古典演劇の科白の基本として受け継がれた。

万葉集に残された縄文人階層の歌である防人の歌がある。防人の兵士として徴用された彼らの苦しみの歌である。加藤周一氏の日本文学史序説からその箇所を引用する。

『防人の歌は、徴兵を嘆き、徴兵官を憎むものであった。』

国^{くに}の 防人^{きさもり}つどひ 船乗りて 別るを見れば いとも為方^{すべ}無し(巻二〇、四三八一)

「防人」の出発は、「いともすべ無し」であって、実にどうしようもなく悲しいものであった。

ふたほがみ 悪^あしけ人なり あた^{やまい}病 わがする時に 防人にさす(巻二〇、四三八二)

急病の時に自分を徴集した男は全く悪いやつだという感想。そういう感想が一方にあり、他方には妻を思う美しい歌があったのである。

筑波嶺の さ百合の花の 夜床にも愛しけ妹そ 昼も愛しけ(巻二〇、四三六九)

これが兵役三年、東国から筑紫へ送られた大衆の声である。以上の三首は、いずれも、「丁」、すなわち雑兵の歌である。』

最下層の兵士は無理やり徴用された農民であり、縄文人層の民であったと思われる。同じ防人の歌でも階層が上のものは違った歌を詠んだ。引用を続ける。

『「防人」には階級があり、その指導者を「火長」といった(「養老令」、七一七～七二三、「軍防令」)。「火長」の歌のなかには、次のようなものもあった。

今日よりは 顧みなくて 大君の 醜の御楯と 出で立つわれは(巻二〇、四三七三)

大衆は決してそういうことをいわなかった。』

ここに使命感を吐露している「火長」は、縄文族でなく弥生族か天孫族の防人であろう。万葉集は天孫族である天皇から縄文族までを網羅した稀有の歌集である。縄文人である最下層の民の文芸は、万葉集を最後として、その後の古今集など以降の歌集にはもはや登場しない。

要約すれば縄文族は、社会権力からは疎外されたが、逆に「政治からの自由」を自らのものとした。政治に関与せず、政治は支配者層が苦勞するものと眺めている。支配に従順に従いながら、自分たちの本領である精神の自由人であることを求めた。言語文化を豊かにもち、自然な信仰心をもち、それを表現する祭りを好み人の紐帯を強めた。祭りにつきものの芸能を好み育んだ。日本の芸能の源流はここにある。

建て前にとらわれことが無いため、独創的な人材を生みだすことができたであろう。

3、江南の稲作人を受け入れた弥生時代 <勤勉な組織人>

江南の文明の特徴は稲作と女系家族だといわれる。日本に渡来した江南の民は追われて逃亡し避難場所を求めてきた民である。縄文の社会も女系だったとすればこの稲作の民と融合しやすかった。

女系家族からシャーマン指導者は出た。卑弥呼がその典型で、女性シャーマンが支配者である時代は平和であった。

農業によって富の蓄積が生まれ、それを守るための武力が社会をリードする世になるにつれて、シャーマンの夫が権力に登るようになる。山口県の土井ヶ浜遺跡のように弥生時代の人骨から武器による殺傷傷をつけたものが見つかる。縄文時代にはなかったことで、村は、吉野ヶ里遺跡のような環濠を作り見張り台を建てた。

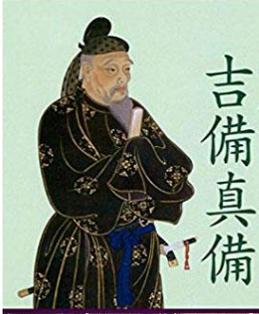


卑弥呼の邪馬台国は、北九州宇佐に拠点を置いたと推定する学者が多い。

北九州の江南族より先に同じ江南からの移民が出雲に古代王国を作り、出雲を起点として各地の縄文人の歓迎を受けながら、東方に、そして南下して、ついには大和地方まで支配した。彼らは出雲風土記に残る国引き神話のように国土開発に熱心に取り組んだ。彼ら出雲族の残した思想影響力は大きかった。それは稲作王国である組織を重んじる特徴を持っていた。組織に同化して働く組織人という日本人の特質は、この弥生文明の指導者層の力量と、従順に組織に従う縄文人のコラボレーションで生まれた。勤労を尊ぶこころも、思想化されるようになった。

一方この弥生族は、下に縄文族を従え、天孫族が来てからは彼らを上に祭り上げた。その結果彼らは社会の上と下の社会層を見渡せる位置にいることになる。勤勉で上昇志向を常に持っていた。古代中世を通じ、中国に留学して知的指導者となった人達はこの階層の出身者である。吉備真備などの遣唐使出身の官僚や、最澄 空海 日蓮などの仏教指導者がそうだ。

彼らは社会哲学を持つことができたし、そこから日本の思想家がうまれることになった。ずっと時代は下がるが例えば二宮尊徳はその代表的存在である。彼の思想のユニークなことは、農民に勤労の大切さを説き、一方で上層支配層に分度を押し付けたことだ。



最澄 空海



世界的にもこの種の発想はないほどユニークは実践思想家である。

4、天孫族が支配者となったやまと時代 <支配層としての役柄本位>

弥生時代に全国にうまれていた小国群をまとめて、ついにヤマトの国を統一した天孫族は、日本の支配者の思想の骨格を体現する。

天孫族の祖であると推定できる燕王国の亡命王朝の人たちはどのような思想をもっていたのか。燕の母体は周王朝だ。周は殷を滅ぼして覇権を打ち立てた統一国家である。殷はシャーマン連合であったといわれる。それを倒したとき周の思想は「天命」であった。天命によって覇者となったと主張し正統性の根拠とした。その理念は覇者が単なる武力の持ち主ではなく、天に恥じることの無い倫理を持っているから天命を受けることが出来たと主張した。この倫理観はこの後生まれる儒教に影響を与えた。逆に儒教が理想とするのが周王朝であった。

燕の王室は、周王朝の有力な分家であったので、同じような「天命」の思想を持っていた。後に燕王国は、秦の始皇帝に追われて敗退して中国大陆を追われ朝鮮半島に亡命したが、その王室は別の天地で政権を再現すべき「天命」を帯びていると信じていた。彼らは倭の国でその「天命」を果たす国家を建設するという目的意識を鮮明に持ち続けていた。100年以上の歳月と朝鮮半島を縦断する道を突破して、ついに念願の倭の国に覇権を実現したのである。その「天命」による国家を、武力による征服ではなく、支配下の民に彼らに「天命」があることを承認させ、その意識を植え付けることによって達成したのである。

古事記にその宣言がある。『天照大御神の命以ちて、「豊葦原之千秋長五百秋之水穂国は、我が御子、正勝吾勝速日天忍穗耳命知らず国ぞ。」と言因さし賜ひて、天降したまひき。』理屈抜きの支配宣言である。それが被支配者一同に受け入れられるだけの存在感が天孫族にはあったのだ。弥生時代の群小国家は、吉野ヶ里遺跡にみられるように、環濠と見張り台を立て、お互いを敵視し合っていたのである。それが天孫族の巧みな説得で統一できた時、狭い垣根がもはや不要となったのだ。それが歓迎されない筈はない。

彼らが打ち立てた制度的思想的仕組みは天皇制として結実した。それは日本の表看板となりそのユニークさは世界にも際立っている。天皇制の確立は7世紀の天武朝になるが、源流は天孫族のヤマト朝廷樹立の時、遅くとも3世紀にある。天皇制の本質は理屈抜きの「万世一系」にある。また天皇はシャーマン的な祭祀長である点で、縄文族、弥生族共に親和性を持って受け入れやすかったこともある。

覆されることのない仕組みは決して支配者が自ら名乗るだけではできない。むしろ被支配層がそれを良しとし維持しようと承認したから継続したのである。中国や朝鮮半島の王朝と比べるとその違いがはっきりしている。



その名を確立した天皇制は、政治実権を持っていた天武時代に名実ともに成立したが、天皇自身が実質支配したのはわずかな時代である。そののち政治実権を失った後も天皇制は宗主権を持ち続け、日本社会の持続性統一性を持ち続けることに貢献した。摂関政治にせよ、武家の幕府にせよ彼らは常に天皇を旗印として自らの権威の後ろ盾としたのである。

天皇制の持つ功は日本社会に安定をもたらしたことである。権力争いはいつの時代にもあったが、天皇制が奇妙なカウンターバランスの役を果たして争いを集約させていた。一方弊害は次のようなものだ。まず建て前としての絶対的権威すなわちアラヒト神なる存在を世襲の人間に憑依させたが、当の天皇は欠点のある人間であり、神的存在であり

続けるわけにはいかない。建て前と実体の乖離はいつの時代にもあった。そのため日本人は超越的権威を本音では相対化してしまい、超越的至高的存在を本音では信じない性向を持ってしまった。

第2に建前としての絶対権威を上を持ってしまった限り、それを後ろ盾にして施政を行うものは、上の支持さえ得ていれば安泰なので、下に対する責任は持つ必要がないことになったことだ。上に対する無限責任と、下方に対する責任欠如である。この後の時代は、天皇制を利用して支配階層内部の権力争いにのみ専念できることになるのだ。それは摂関制の平安時代といわず、太平洋戦争を起こした昭和の軍部に至るまで、一貫して為政者の共通の姿勢であった。真の超越を失い、逆に極大の政治的無責任をもたらした負の遺産を日本は背負うことになった。

第3に建前と本音の分離は黙認されたが故に、建て前は道義的に立派なものにした。「武士は食わねど高楊枝」といったように世俗の富には軽蔑のまなざしすら向けた。忠孝の名誉に命を懸けた。後に武士道と名付けられた道義となった。彼らは統治者の側に立つ一人であるとの誇りを持てた代償として、人間味の無い堅苦しさの中で生きることをやむなくされた。

天孫族による支配体制は天皇制という日本独自のスタイルをとって進められたが、それを運営したのは天孫族を中心とした天津神の子孫たち貴族と、協力者となった弥生族である国津神の子孫たち豪族である。源氏・平家などの武士階級も源流は天皇の傍系子孫か同盟豪族である。その点で武家支配も天孫同盟族の流れの支配である。明治時代まで続いた武士階級は人口の数%であるが、決して農民や商業の人々から武士に登るものはおらず、階級区分は厳しかった。だから戦国時代の覇権争いも、明治維新もまた、この支配層の中での覇権争いであって、日本ではついに本質的な「下克上」は一度も起きなかったのだ。(秀吉は下層足軽の出であっても自らを上流階級に仮想したのであるから、同類だとみてよい。)

実は敗戦という最大の転換点を経ても、時代が安定してくると再びその支配同盟族が現代でも継続しているのである。戦後間もないころの片山哲総理がほとんど唯一の庶民出身の総理で、それも短期で終わったあとの歴代総理はやはりこの支配階層の出自であり続けた。共産党だけは絶対排除という価値観が共通で、現代も支配を続けている。

天孫族はその天皇制の説得力を作り上げるために、天とのつながりを神話として完成させなければならならなかった。それは7世紀になってようやく記紀神話として完成した。物語だけではない。社会的装置としての国家的神社を作り上げた。それは縄文文明

の太陽の祭りを巧みに利用したのだ。縄文人たちが大切にした祭りの聖地を、神社として形式を与え、主祭神に記紀神話の神々をあてることにさせた。縄文人たちはその聖地が飾られ、盛大な祭りを行うことができれば、主祭神が誰であれ、異をとらえなかった。日本の神道が内容の無い、何でもありで、しかし形式だけは尊重する底の浅い宗教となったのはこの成立の事情によるのである。

まとめて言えば天孫族とその同盟族に共通する特質は、国家統一の意欲を持ち続けたことだ。「国体護持」が究極の望みであった。常にあった権力争いも、より強力な国家統一の指導者になる意欲から生まれた。トップまでいけないものも、いつも勝馬を探し、その馬にぶら下がることで自らの位置づけと生き残りを図るのが彼らの生きがいであった。彼らの目は下には向かず、作り上げた中味の無い天皇の権威を利用して支配し続けた。究極の無責任を内に秘めていた。

空疎であってもそれに仕えるために、自然に建て前を重んじ本音を押し殺した人間味の無い堅苦しい生き方となるのはやむを得なかった。

5、これら3つの混合が生んだ原日本精神。

結論を要約すると、日本は、大多数を占めた農民は第1の縄文の出自であり、社会の中核の指導者層は第2の江南弥生人の出自、政治支配をし続けた上層の貴族武士階層は第3の天孫族を出自として、それぞれ長い歴史を階層の逆転などなく安定して継続した。それぞれの階層はその思想的特徴を維持し続けた。即ち上層の貴族武士階層は、統一国家の維持という役割重視型の思想、中層は農村指導者や商工階層として組織重視の勤勉重視、下層は農民で従順で政治から距離を置き芸能や祭り好きというそれぞれの気質を持って相互補完し合ってきたのである。日本思想というのは、全体を統一したものはなく、万華鏡のごとく、どこに焦点を当てるかで見え方は変わるものである。

ひっくり返して日本人の源思想の特徴として語られる次のようなことは、万華鏡のどれかに焦点をあてれば光るものであり、逆にすべてに当てはまるものではないのだ。

- 1、外部からもたらされた新しいものは歓迎し受け入れるが、まずは表面的で、深層はしぶとく残る。
- 2、祭り好きで奔放な発想に富み、ノーベル賞級の成果を上げることもある。
- 3、組織として働くことが性に合っていて、かつ勤勉である。

- 4、建て前を重んじ、本音は控える。政治的責任も深刻に受け止めず、特に下に向かっては無責任となる。
- 5、絶対神が無いので、世俗的現世主義である。
- 6、人間と自然との垣根が低い。

このような万華鏡的原初の精神構造を内に持ちつつ、やまと国は統一国家として世界に乗り出した。

その後の 2000 年の間、奈良時代の仏教伝来、戦国時代のキリスト教伝来、江戸時代の儒教とりいれ、明治維新の西洋科学技術思想の受け入れ、そして昭和の敗戦という 5 つの外からの試練に次々に遭遇していくが、この原日本精神はその特徴をもって、世界からの新思想の流入に日本流の対処をし鍛えられていったのである。次にその試練の様相を詳しく見ていこう。

6、奈良時代から近代までの日本的精神の試練

6-1 仏教伝来とその日本化

まず奈良時代 仏教が渡来した。異質の宗教の到来であったから、衝撃的であり、拒絶反応があったと予想されるが、実際はすんなりと受容された。縄文族は祭りを通じて太陽や自然宗教を持っていたが、この層にとっては、仏教伝来はよそごとであった。天孫族 弥生族が当事者であったが、彼らの神話は神道という宗教にまで高まっていなかったもので、いわば白紙の中に仏教は伝来したことになり、抵抗はなく歓迎されつつ受容された。しかしその受容は日本化を伴うものであった。



元来釈迦の教えは人間の心の救いを目指していたが、仏教を受け入れた奈良時代、それは国家鎮護の宗教として天皇の治世の後ろ盾とされた。やがて土着信仰のシャーマニズムと融合して病氣治癒、災害除去祈願の宗教となり、自然崇拜の風習とも融合して山岳仏教にもなった。それらはいずれも釈迦の仏教とは無縁である。

武家社会になり、騒乱とともに死と隣り合わせの社会ともなり、来世に希望を与える

浄土信仰が力を得るが、江戸時代の総檀家制度はキリシタン弾圧の道具となり、さらに釈迦の仏教とは離れて、日本独自の仏教となっていった。

明治大正時代に始めて西欧の仏教学者を通じて、釈迦の本来の原始仏教を伝えられるまで、驚くべきことに日本の仏教は釈迦の教えは何であったかを知らずにきたのだ。

6-2 キリシタン教伝来と宗教への危険視

16世紀欧州の大航海時代の流れに沿って日本にキリシタン教が伝来した。大名たちはキリシタン教布教者から世界観を教えられるとともに、貿易の経済的利益を求めてキリシタン教に帰依したものも多かった。彼らは禁教令が出るとほとんどは棄教した。しかし洗礼を受けた縄文由来の農民たちは来世を約束するキリシタン教にいのちを捧げ、弾圧されても棄教しなかった。来世を約束した点では浄



土宗も同じであるが、僧たちは社会的地位が高いので布教に熱心ではなかったが、キリシタン教宣教師は貧しいまま裸足で宣教していたし、受洗を受けたものはこれでパライソ（天国）に入れるとの実感を持った。50年のうちに日本人口の1%がキリシタンになったのである。この農民キリシタンは悲惨な弾圧に身を挺して闘って死んでいったのである。極めて希少な部落に隠れキリシタンとして江戸時代を耐え生き延びたものがいて後に世界を驚かせた。

宗教的に抵抗したのは日本的仏教を奉じていた僧侶たちである。また天皇の上に神の存在をおくキリシタン教を日本の支配者たちは許さなかった。禁教令を発し宣教師を追放した。一部隠れキリシタンは生き延びたが、実質的に日本は世界的宗教であるキリシタン教を日本では廃絶したという実績を持ったのである。日本精神に与えた影響は、日本では宗教より世俗権力が上位だと認識したことであろう。それは世界的にユニークな現象なのだ

6-3 儒教と江戸哲学

文明の先進国でありつづけた中国の中核思想である儒教と老荘思想は、上層支配階層に影響を与え続けた。それらも日本化した形に変化して定着した。儒教に関しては、日本が天皇を絶対化する都合上、儒教がもつ世界観と宗教性は受け入れず、音楽も取り入れず、単に上に立つものの道徳律としてうけいれられ、武士道に結実した。老荘思想もその世界観は受け入れず、理屈抜きの感情的な受け入れにとどまった。たとえば出家へのあこがれや、わびさびの文化として発展した。受け入れた階層はむろん天孫族から由来する武士階級である。

特に儒学が江戸時代幕府の公認学とされたときは、林羅山のように宋学・朱子学をまっとうに受け入れたのである。ただし朱子学の中心概念である太極とは実は天之御仲命であると記紀神話に結びつける改革を加えた。このような読み替え解釈が江戸時代の連続と続く儒家たちの活動だったのだ。その特徴は幕府の御用学である範囲を超えることなく、理念を避け、幕藩体制保全の理論となったことだ。例えば荻生徂徠のように藩主向けに君主なる道の学に仕立てた。

中世期の主従関係は主君と郎党間の契約関係で何度も主君を変えることをよしとしていたのだが、江戸時代の安定した幕藩体制にはいり、それを維持するイデオロギーが要求された。そこで中国風の儒教的な倫理（「仁義」「忠孝」など）に加えて、新たに「主君は絶対的で命を懸けて尽くすもの」、が主な道徳として加えられた。「葉隠」にある「武士道と云ふは、死ぬ事と見付けたり」なる殺伐な気風となった。主命による切腹や敵討ちといった武士の間のいのちの軽い処分は日常的な覚悟とされたが、武士は町民に向かっては「切り捨て御免」の特権を持っているとの無残な考えが生まれた。日本では草薙剣以来、刀剣に対するフェティズムがあるが、「刀剣が血を呼ぶ」ままに人が従う「大菩薩峠」の机龍之介のような冷酷無残な辻斬魔が実在横行した時代となった。

いのちを賭して主君を守ることを最高の道徳としたという根幹を隠して「武士道」を美しく表現せざるを得なかったのが、世界に目を向けたクリスチャン新渡戸稲造であった。いまも武士道をそのように見



る人は存在する。

しかし命を懸けて主を守る思想は、さらに明治以降士分を越えて国民全体に拡大され、20世紀の戦争時代明治大正昭和の時代を導いたイデオロギーとなり、ついに「一億玉砕」の敗戦でようやくやむという国民の代表的思想となってしまった。

このように江戸時代300年の間の、武家の儒教文化は死の文化を生んだが、一方でこの時代初めて華やかな町民文化が開花した。町民とは中には少数の没落武家浪人の出もいたが、中心は裕福な農家出身の弥生族と、さらに上昇志望の縄文族である農民からの成り上がりもいたのである。彼らのなかに儒学者となったものもいた。大阪の町民出の



富永仲基、東北出の安藤昌益、国東半島の農民三浦梅園などがそれぞれの儒学を展開した。さらに大阪商人の石田梅岩は禅の悟りを実学に取り入れたユニークな心学を作って多くの弟子を得た。彼らの儒学はこれまでの枠を出て儒佛批判、身分制批判まで含んでいったのである。

一方で三重の本居宣長は、祖先は高貴な武家との誇りを持っていたので、おそらく天孫族の子孫だとみられるが、古事記伝を和文で書き表した、先祖のやり残した大和心の哲学を開拓した。

このように儒学という言葉が公認の学会の場が江戸時代にうまれて、天孫族・弥生族・縄文族の3階級の混在の中で様々な日本哲学を生みだした。それは世界に通用するレベルではなかったかもしれないが、少なくとも我が国での「学問という世界」を作り出したのである。そして新井白石を端緒とした蘭学につながって世界への窓を開いていった。



橋千蔵像(東京国立博物館)

このように江戸の町民文化は、学問芸能分野で、はじめて3階級の相互浸透が生み出したのである。天孫族弥生族の連合支配 縄文族の下支えという三位一体の構造は基本的には変わらず、ただその間に相互浸透がうまれたため、あるいは強固な一体化が進んだともいえよう。江戸時代の寺子屋に始まる庶民教育の普及がそれを促した。

6-4 明治維新と西欧文明の受け入れ

明治維新は西欧列強の脅威を目の前にした日本の支配階級の再編成であり、支配階層での上下入れ替えなどは全く起きなかった。名目的には絶対的天皇制への復帰という形はとっているが、天皇支配が復活したわけではない。より近代的な形態での利用に変わっただけだ。また士分の解体はあったが、国民皆兵とするための手段で、士分の最下層が解体されただけで、国家支配の実権は、支配階層内のたらいまわしで維持され逆に強化された。形式上の天皇制は見かけ上すべての権力集中と、上御一人に形だけを背負わせた総無責任という最悪の形となった。

統制国家体制での効率的な国家経済の導入育成ができたので、西欧列強への実力接近は素早く行われた。ここでも日本原思想は有効であった。支配階層の統率、実指導層の組織的实力、従順な国民性の三位一体が有効に作用したのである。しかしその欠陥も見事に発揮された。支配階層の独善と究極の無責任は世界大戦に導き、国家を焦土にまでしてしまった。

6-5 敗戦と戦後

敗戦と占領時代に日本の軍国主義は解体され、財閥解体 農地解放 爵位廃止などの変化はあったが、国体護持を最後までこだわった支配体制はしぶとく生き延びた。占領した米国もそれを支持した。

頂点の天皇制は国民統合の象徴とされ、本質は数100年前にもどって維持された。ほぼ維持された三位一体社会が、その関係のまま再び稼働し始めると、変わり身も早かった、戦後は経済だとなれば、得意の組織人ぶりを発揮して、瞬く間にジャパンアズ NO.1といわれるまでになった。

平和憲法こそ縄文精神的であり、身に合っているので戦後70年保持できた。新しいものが好き、どんどん取り入れる。日本人にノーベル賞やイグノーベル賞受賞者が多いのは縄文精神だと指摘する人もいる。

欠点もそのままに残り、それが顕著にあらわれているのがアジア近隣諸国との戦争責任の処理である。国内的な無責任処理はうやむやに許容されたが、朝鮮半島 中国 アジア諸国に対する戦争責任無視は国際的批判の目は厳しい。ドイツとは対照的である。

天皇制が変身して生き残ったため、日本政治の遺伝的欠陥も未解決のままである。人間としての天皇は、基本的人権もない存在のまま「国民統合の象徴」とは何かを天皇本人が模索し表現する以外ない。天皇個人の資質と努力が問われる危い存在だ。その一方では、象徴天皇制を実質的に絶対化することによって、無責任政治をカバーしてくれるバックボーンとして利用しようとする反動的な努力は、今も為政者の大半が所属する復古的団体で隠すことなく継続している。特に今回の退位と即位の騒動で日本中が新たな洗脳作用を受けている。日本内部からの批判の目は薄弱だ。

7、地球時代のヒューマニズム思想から見る日本精神の弱点

今後の課題と展望

5つの試練を経てもなお日本の三位一体の万華鏡体質は継続している。上部支配構造の親方追随と下への無責任構造、中間を支える層の経済最優先思想 道義心より利益優先の世俗的現世主義。下部層の現状追認・無反抗の従順が続いている。

この日本の体質は内側からは馴れてしまって奇妙にも思わないが、世界の目から見れば、尊敬されないものだ。いわば駄々っ子日本なのだ。

地球に危機が迫りつつある現代、それなりに存在感のある日本が、地球的問題解決に役立つ存在であるためには、2000年続いた本質を自らの力で脱皮しなければならないであろう。実はそれは日本のためだけでなく地球規模で重要なのだ。

直面している地球的規模の危機とは何だろうか。

生存を脅かしつつある地球温暖化と、グローバルな格差拡大による貧困化である。いずれも人間集団のエゴが、ITと金の力が相乗して、指数関数的に拡大作用しているから起きているのである。今はそれを止める手段を人間は持っていない。なぜなら人間が、まだエゴで生きる動物的側面を捨てることができないでいるためだ。

人間が動物的エゴを克服して「地球時代のヒューマニズム」にたつことできるのは、ベルグソンの言う人間の新たな進化を成し遂げたときにできることであり、容易なこ

とではない。しかし、人間が現世だけの存在ではないとの確信は、かつては空想的とされたことが、今多くに人々に理解支持されるようになりつつあり、また逆にそのような新人類への脱皮しか人間の存続が出来ないような状況になったのだ。

そのように考えると反エゴ、反金権、反核などの「地球時代のヒューマニズム」への脱皮が必要なのは日本だけではない人類的課題だと知れる。しかしこれまで分析してきたように日本社会がもつ欠陥は、最も世俗的な社会という点ではっきりしており、その転換効果がおおきいし、対応すべき人間の教育レベルが高いから解決に近づきやすい可能性がある。いや先行すべき義務があると考えたい。

「地球時代のヒューマニズム思想」から見えてくる日本精神の弱点は何だろうか。

第 1 に、多くの欠陥が集約的に現れている日本政治であろう。上への絶対服従と周り下への無責任は、今天皇の替わりに米国が置き換わっているだけである。沖縄民衆を無視し米国の戦争戦略に追随する。米国が抱える矛盾を小国である我が国で引き受け再生産すれば破綻する。

天孫族政治が過去破綻したのは敗戦の時であった。その時政権維持はきわどかったが、当時の冷戦下で米国の世界支配の野望に加担して生き延びたのである。

天孫族が巧みな天皇制シンボルを掲げて統一国家を作り日本列島を護ったことは、弥生時代から 19 世紀の帝国主義世界の時代までは確かに意味のあることであった。(むしろそれが逆作用で日本列島を惨禍に導いたのではあるが)

しかし人類はその段階をようやく脱皮した。コスタリカや本来の敗戦日本のように無軍備こそ国際社会で安全に生き延びる環境が 20 世紀の後半から生まれているのである。そのような環境下では、天皇制賛美のナショナリズムで統一国家を維持しようとするのは時代錯誤で無用となっている。それに酔いしれる日本人だけでは、この美しい日本列島の風土も社会ももはや維持できなくなっており、否応なしに多民族共生の場とならざるを得ない。そのような新たな日本列島の育成のためには、いまや有害である。

おそらくいまの 3 体制の政治破たんは、今後国際関係の中で起きる。その時、物言わぬ服従の縄文族が 2000 年来の沈黙をやぶって、初めて政治を任せてきた天孫族への反乱となり、せめて弥生族への政治のバトンタッチが生まれる時代になるだろう。

それは IT という道具が出そろった現代にして可能となり、破たんに耐えきれなくなった縄文弥生族が自覚した時に起きる。

第2に利益優先の世俗・現世主義という限界は、老人国日本の内部から変化を求められるだろう。日本が直面している少子高齢化社会の中の老人の存在のむつかしさに、このままの原日本精神では解決の道が見えない。脱皮が必要なのである。

経済万能の世俗主義の尺度からすれば、老人は経済効率の悪い脱落者としてしか評価されなくなった。老人は周りに面倒を掛けるだけとみられ、また高齢者自身もそのように自らを見るようになった。自墮落になるほかないのである。問題の解決その対極にある。

老人が人生の達人として尊敬される存在になってこそ、望むべき老人問題の解決がみえてくるのだ。それが実践されている例も残っている。それは日本の祭りである。縄文の伝統を受けついでいる巨大な祭りは、たとえば東北のねぶたであり、四国のよさこい、九州のどんたくなど各地に数多くのこっている。それらの巨大祭は今年が終わればすぐ来年の準備を始める、1年を祭りを軸として回るそう。そこでは唯一尊敬される老人の出番がある。しかしそれは思想化されないし一般化されない限界がある。

人間は老いていくにしたがって身体は衰えるが、精神は衰えることなく「成熟」していかなければならないし、それが可能なのが人間なのだ。なぜなら成熟した精神は身体から、やがて独立して飛翔していくようにできている。「成熟」とは何か、この特質を認識して、死に近づいて行くまでその成熟につとめ、またそれを楽しく覚悟ができることであり、新たな生への転機を待ち望めるようになることだ。

死の先の世界に気づくことによって、若い世代が先に転機をもたらし始めているのがアニメなどの文芸だ。21世紀になって前の世紀では見ることのできない傾向が出始めている。それは死後の世界との交流がひんぱんに題材に取り込み始まったことだ。前世紀はこのテーマは科学的でないとして一蹴され、むしろタブーとされていた。20世紀の後半、科学技術信仰が力を失った。原子力技術が人類の救世主から悪魔に転落した、本流の科学も「超ひも理論」で物質の究極に迫ったと見えた瞬間、それは実はわずか4%の物質しか相手にしていなくて96%は科学が扱えない物質であると分かった。

科学的でないという批判は力を失った。霊界との交流物語は新しい重要なテーマとして一挙に噴出したのである。「原日本精神」の「超越を拒絶する世俗現世主義」は、ここからその一角が崩れて始めている。

いつの日か科学は、この宇宙の最大構成要素であるダークマター・ダークエネルギーの科学が生まれる時代が必ず到来する。その時今は解明できないでいる人間の精神の存在が解明される。なぜなら人間の精神は、ダークマター・ダークエネルギーによって構成されていると私は推定しているからだ。ベルグソンは、人間の精神こそすべての生命

進化の頂点として人間に内在できた存在であり、肉体の「死」と共に消滅することのない存在であると考えた。「死」が新たな生への「転換点」「精神体の5次元世界への飛翔」であることを、解き明かしてくれる時が来るであろう。

その時こそ、超絶拒否の世俗現世主義は消滅し、日本の老人の心に成熟への努力の決意は訪れ、老人への尊敬を認める社会へ変身する。それは老人ばかりでなく全世代にとっても生き甲斐の高度化をもたらすことであろう。

日本の脱皮は、その課題があからさまに見えているだけに解決は早い可能性があり、もし日本が根本的解決への道を歩み始め得たとすれば、それは今まで迷惑ばかりかけてきたダダっ子 日本が初めてできる人類世界への貢献となるのだ。

<完>

参考文献

古代人の精神世界 湯浅泰雄 ミネルヴァ書房 1980/11/20

日本の思想 丸山真男 岩波新書 1961/11/20

武士の日本史 高橋昌明 岩波新書 2018/5/22

日本文学史序説 上下 加藤周一 筑摩書房 1980-4-10

いま宗教に向きあう 1 現代日本の宗教事情国内偏 I 堀江宗正編 岩波書店 2018-9-26

階級社会日本 橋本健二 青木書店 2001-5-23